
仮面ライダー Y (逆人)

84g

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダー Y (逆人)

【Nコード】

N4522R

【作者名】

84g

【あらすじ】

サカビト⇨代々木悠貴は改造人間であるが、仮面ライダーではない。

仮面ライダーを倒すために悪の科学者によって拉致・改造され、子供を庇った仮面ライダーを殺害してしまった一般人だ。

人々から英雄を奪った罪を贖い、子供たちの笑顔を守るため、サカビトは今日も戦うのだ。

序文 『代々木 悠貴』

俺は、何になりたいんだろう。

なりたくないものは山のように有るが、それ以外のどれになっても構わないような気もする。

サラリーマンはイヤだし、大学に入ってカネと時間を無駄遣いするのモイヤだが、何を作りたいわけでもない。貧乏人もイヤだが金持ちもイヤだ。

…ただ、今一番やりたくないのはアクセルを緩めること。

俺は山道に作られた旧国道を走り続ける。ひとりが好きなわけじゃない、ただアクセルを緩めたくないだけだ。

後ろから付いて来ているはずのダチの気配を感じない。いつもこうだ、ツーリングになりはしねえ。どうしてアイツらは遅いんだ？

気配も前触れもなく、ただ当たり前に、そのマシンは俺を追い抜いた。

「え」

早い、速い。なんだコイツ。

気付かないうちに現れた俺の前を走る男、俺は気付かないうちにその男の後ろを無我夢中で走っていた。

嵐のように台風のように、前を走ってるのが当たり前ってスピードで。

風切り音がヘルメット越しに聞こえてくる。俺も目一杯飛ばしてるのに追いつけない。

「変・身ッ」

掛け声と共に、その男が変わった。怪人だ。人間じゃない。バイクも見たことのないような形に変わった。

なんだこれ、なんだこれ、なんだこれ。心臓がウルセえ。息が間

に合わねえ。それだけ飛ばしてもそいつの背中は何気楼みたいに遠くに行っちゃう。

そして、そいつの背中がフェードアウトしても、俺はアクセルを緩められない、そいつの背中を追いかけていた。

俺が追いついた頃には、既に戦いは終わりかけていた。

地面には頼りなさそうで同じ姿をした怪人たちが倒れており、その中心でさっきのバイク怪人と、それとは全く異なる禍々しいコウモリのような怪人が戦っていた。

バイク怪人の腕にも牙の跡があるが、それでもバイク怪人が倒れる姿がイメージできない、いくら攻撃を受けても倒れる気がしない。

ギツシャアアアアーツツ

コウモリ怪人が金きり声を上げながら力ギ爪で襲い掛かる。だがバイク怪人は謎のポーリング後、大きく空中に飛んだ。

そして、落下地点にはコウモリ怪人が図ったように突撃してきていた。そして

「ライダアアア・キイツクツツ！」

急速落下によるドロップ・キックを受けたコウモリ怪人の身体に血管のような火線が走り、その次の瞬間、轟音と共にコウモリ怪人は跡形なく爆散した。

「…すげえ」

バイク怪人もそのとき俺に気付いたように振り返った。

俺は緊張した。もちろん怖いけど、それよりもどういうことを話せばいいかが判らなくて緊張した。

「…よ、よお」

「…さっき、道ですれ違った…バイクの…」

ヘルメットのようなマスクのせいかな、そいつの声は良く聞き取れ

なかったが、奇妙なことに俺は、そいつが俺のことを覚えていてく
れていたことが無性にうれしかった。

「…スピード…出しすぎ…危…いぞ」

「あ…？ ああ、悪い、気をつけるわ」

その俺よりもこの男はスピードを出していたのだが。

そんなことを云う間もなく、そのバイク怪人は再びバイクに跨り、
平然と走り去った。

「あ、つて、オイッ？ 待てよ！ アンタ！」

気が付けば、累々と撒き散らされていたはずの同じ格好をした…
テレビのナントカレンジャーに出てくる戦闘員みたいな連中も既に
消えていた。

あとに残ったのは、俺と俺のバイクだけだった。

「逃がさねえ、あんたには…あんたには、聞きたいことが山ほど
あんだよッ！」

あいつの正体なんてどうだっていいが追いつきたい。俺はバイク
に飛びつき、イグニッションプラグに点火し、走り出した。

いくら走っても追いつけないが、追いついてみたい、もう姿を捉
えられなくなっていた。どっちに行ったかも判らない。

それでも俺は走っていた。

喧嘩を売ったことはない。ただ買わずに済ませたこともないだけ
だ。

バイクの免許はない。ただ白バイ野郎より速いんだから必要ない
だけだ。

俺のあだ名は百人切り。百人は殴り倒したが百一人目をヘッドバ
ツドで倒したら頭蓋骨にヒビが入って入院しただけだ。

勝つのが好きなんじゃない。ただ気に食わない連中にデカイ顔を
させるのが嫌いなだけだ。

俺の名前は代々木悠貴、親父は気に入らないが、この名前は気に

入ってる。

「…あ？」

変だな。俺は今、来た道を下ってる。

さっきのバイク怪人に会えないのは、あいつがどつかで別の道に行っただか、まだあのスピードでぶっ飛ばしてるからだろう。

だが、誰ともすれ違わない。いつも人通りの少ない道だが、それでも俺のダチが俺に追いつこうと走ってるはずだ。

嫌な予感がする。アクセルを緩めたい、Uターンしたい。だが嫌な予感がするからこそ行かないやいけな。

ダチが待っているはずだ。

「ちょうどいい、彼で実験体は二十六体揃うじゃないの」

散乱しているバイクはどれも見覚えがある、あいつらのバイクだ。道路を染めている赤にも見覚えがある。信号の赤と同じでそれを見ると止まりたくなる。血液の赤だ。

俺は、無意識のうちに怪人たちに向けてバイクを飛ばしていた。

第一話 『野戦&勇者&天折』

なんだよ、これは。

身体は作っていた。鍛えてはいた。だが胸板が鉄になることなんてありはしなかった。

強くなりたかった。鍛えてはいた。だが腕が凶器になることなんてありはしなかった。

未来が欲しかった。鍛えてはいた。だが他人の夢を砕くことなんてありはしなかった。

メタリック・グリーンの光沢、耳障りな鼓動、止まってしまったくなる衝動、だが俺の身体は俺の心には従わずに小学校を破壊していく。

「い、う…あ…」

言葉にもできない恐怖を湛え、幼いその手は助けを求めている。振り上げられた俺の鋼鉄のブーツは、あっさりと彼女の上に振り下ろされる。

誰か止めてくれよお、止まってくれよオオオオオツツ！

乳牛程度ならば簡単に弾き飛ばせる俺の一撃は、クロック数を操作された俺の脳髄に彼女の死様をコマ送りで見せ付ける…はずだった。

「現れたな、仮面ライダーっ！」

俺をこんな身体にした狂科学者が、風よりも速く俺を弾き飛ばしたバイク怪人をそう呼んだ。

「早く逃げろ」

仮面ライダーと呼ばれた怪人は、動ける子供たちに端的にそう云

った。

力強くそれでいて優しい言葉で云われて涙もそのままに、子供たちは傷付いた同級生を助けながら逃げ去っていく。

「待っていたぞ仮面ライダー、貴様に倒された同胞たちの恨み…ここで晴らさせてもらおうッ」

威圧的なマッドの言葉に、仮面ライダーは恐れもせず、それが逆恨みであることを断言してみせた。

ヤツの身体は、俺と同じく人とは一線を画した状態であるというのに、ヤツの姿からはあの時見たときと変わらず、誇りと強さが滲み出ている。

「ええい、減らず口もそこまでだ、仮面ライダーっ。この試験体二十六体はそれぞれが貴様と同等の戦闘能力を持っている、いかに貴様とはいえ…勝つことはできんっ」

俺は唸り声を上げながら両腕を構えた。逃げてくれ、仮面ライダー…俺の身体は…もう、俺の意思じゃ動かせないんだ。

あのマッド野郎の思うとおりには動かされているだけなんだ、逃げてくれ。あんたは殺したくねえ…っ！

「やれエツ、我が部下たち！ 仮面ライダーの息の根を止めるのだっ」

マッドの号令にしたがい、俺は正面から仮面ライダーに襲い掛かっていた。

左右前後だけでなく、空中からも襲い掛かる俺たち。その数二十人、ダメだ、もう逃げられねえ。

「…すまない…」

俺たちの怒号が混ざる一瞬間、確かに俺は仮面ライダーの囁きを聞いた。

「トウォオっ！」

モンスター化した俺たちのコンマ数秒の攻撃のタイムラグを読みきった仮面ライダーの軽やかな、それでいて重量級の反撃が俺の左側にいた怪人の胴体を弾き飛ばした。

「な…なに、試験体Dが一撃で倒されただとッ!?」

言葉もなく、仮面ライダーは足払いで背後に居た試験体Hの重心を崩し、それを試験体Xと試験体Jが支えた。

完全に動きの止まったその三体に向け、仮面ライダーは、あのと
きコウモリ怪人に叩き込んだような必殺の一撃を叩き込み、三体を
弾き飛ばした。

「な、なああ!? ありえん! ありえんぞおつ、そいつらは…
全員が…仮面ライダーと互角、互角であるはずなのだアツ!」

マッドが泣き叫ぶ中、次々と試験体たちが倒されていく。

もちろん俺の 改造体Y の攻撃は仮面ライダーに叩き込ま
れており、他の連中の攻撃も少ないが確かに当たっている。

だが、それでも仮面ライダーは倒れない。俺たちの攻撃を避け、
受け、反撃する。何度か弾き飛ばされ、倒れ、膝を折った。だがそ
れでも立ち上がり、闘志を燃やす。

「なぜだなぜだなぜだアッ 立てないはずだ仮面ライダー!
そして立ち上がれるはずだ我が試験体たち! …てアー、試験体T
ッ!」

幾度目かのライダーキック、幾度目かのライダーパンチ、試験体
から拝借したり持参したりした武器での攻撃、その全てが必殺技だ
った。

「きつ、気付いていないようだから教えてやるぞ、仮面ライダー
ッ! そいつらはただ山道をバイクで走っていただけの暴走族…そ
うだ、無関係な一般人だぞ、お前は自らの手で未成年の…」

「判っているッ」

「…エ…?」

「そんなことは判っている、判っているッ」

力強く、喉の底から搾り出すような声だった。

「なんて酷い奴なんだ、一般人だと判っていながら皆殺しか!
正義の味方が聞いて呆れるなあッ!」

マッドの罵声に、仮面ライダーは応えない。

判っているんだ、俺たちがもう元の人間には戻れないことを。それで自分が止めなければ俺たちが誰かを殺し続けることを。

「ライダーアアアーツ！ パアアアンチツツ！」

またひとり、怪人：俺にとってはバイクを並べたダチ、タナカの頭部を仮面ライダーは正拳で打ち貫いた。

崩れ落ちていくタナカの背中へ、憑き物が落ちたように澄み通っていた。

ライダーの背中へ血に濡れていたが、俺にはなぜか仮面ライダーが泣いているように見えた。

気が付けば、三十分にも満たない戦闘によって二十六体居た改造体は、既に俺を残して壊滅していた。

「く、ぐうう、侮るなよ、この改造体Yは私の最高傑作。最強の技を見せてやれッ！」

俺は空中に跳び上がり、恐怖と安堵という実にアンビバレンツな状態に陥っていた。

次に俺、改造体Yが放つ技の名前はフェイタルキック、どういう意味かは知らない。英語かドイツ語かフランス語か、そんなところだろう。

特殊な磁場で仮面ライダーが変身に使用しているエネルギーの一部を奪い、自分のエネルギーと併用して弱体化した相手を破壊するんだそうだ。

俺はふわりと飛び上がり、左足の爪先にエネルギーを充填する。

「フェイターアアールツ」

俺も大多数の男子高校生と同じく、売られた喧嘩は倍額で買う人間だから判る。

相手がナイフや缶ジュースのように防御しても痛いならば避ければいいだけだ。

隙が多すぎる、仮面ライダーならば余裕で避けて、カウンターで反撃を入れれば俺を破壊できる。

「…ッ、キイイイックッ！」

いた大穴から滝のように赤い液体を噴出しつつ、仮面ライダーはマッド目掛けて歩いていく。

「動けるわけがない、動けるわけがないだろう、その穴がなかったとしても既に試験体たちからのダメージで動けるわけがないッ」

俺は仮面ライダーという男のことを知らないが、このマッドサイエンティストはそれに輪を掛けて知らないらしい。

動けないわけがない。なぜならば。

「バカな、来るな、こっちに来るなア」

「…」

なぜならば、その男は仮面ライダーなのだから。

「ライダー…キックッ！」

マッドサイエンティストごときがその一撃に耐えられるわけがなかった。

そして、仮面ライダー自身もその一撃の威力に耐え切れなかった。変身が解け、素顔に戻った先輩は起き上がらなかった。永い戦いの末、先輩は笑顔で眠りに着いた。

俺を操っていたマッドは死んだが、身体は動かない。このまま朽ち果てるだけだ。

目が霞んできた。ダメージが脳に来ているのかもしれない。

手足が痺れてきた。神経系が死滅してきたらしい。

耳鳴りがする。キーンキーンと…飛び散った血液が“鏡”のように光っていて、そこには血とは別の赤をした龍が写っていた。

それが何かを考える余裕もなく、俺の意識は途切れた。

第二話 『ヤンキー&誘拐犯&幼女』

目を覚ましたとき、俺は薄暗い円筒状の縦穴の中に居た。

それがマンホールだと気付くのに時間がかかったのは、全く身動きが取れなかったせいだ。

俺は仰向けに寝そべり、胸と首以外の部分が地面に吸い込まれて入るような形で埋まっている。

もちろん、周囲は泥でもなんでもないのだが、俺の身体は…ちょうど木の樹液の中に蚊が閉じ込められたまま宝石になる…琥珀といったか、アレのコンクリート・バージョンになっている。

「…生きてるのか、俺…？」

マンホールの小さな穴から差している日が随分高い。真昼らしい。服装はワイヤーで彩られた改造学ラン、俺の普段着だが、腹部には40〜50代ぐらいの熟年カップルがアウトドアで使うような、ダサくてデカイウエストポーチが巻きつけてある。

外したいが、手足がコンクリートに埋まって動かない。

…誰がやった？ 仮面ライダーを殺した俺を助けてマンホールに埋めた拳銃、ウエストポーチなんて巻いたヤツは。

助けたこともマンホールに埋めたこともどうだっていいが、ウエストポーチなんか巻くとは…これなら全裸で公道に放り出された方がよっぽどマシだ。

…人目の無いマンホールの中で、心底よかった。

「お生憎様！ こっちには逃げ道があるのよ！」

そんな俺の些細な安堵は、即座に打ち切られた。

マンホールを跳ね上げ、俊敏そうな手足の猫っぽい黒髪の女の子が、日差しを浴びながら俺の腹の上に着地した。

どうやらマンホールに飛び込んだらしいが、俺が下水道への道を塞ぐ様に埋まっているので、俺を踏みつけるような形にしかならな

い。

切羽詰った様子で飛び込んできたが、その女の子が俺の姿をマジマジと眺めて云った第一声は、

「…うあ、ダサっ…」

「判ってるよッ!」

そこで【どうして埋まっている】とか云うんじゃないかとささやかな期待を持ったが、そうだよなあ…普通は学ランにウエストポーチにツッコミ入れるよなあ…。

「っっていうか、退きなさいよ! あたし急いでるんだから!」

「退いてやるから、まずはウエストポーチ外してくれ」

「え、ああ、そうね、まずは…そのダサさはないわね」

話がわかる。空気が読める。さすが女の子。

その子は俺の腹に手を回し、テコの要領で俺の腹から引き剥がした

「…え?」

「ああ?」

ウエストポーチが取り除かれたその部分には、俺は服を着ていなかった。

最近は何ソの下辺りにも毛が生えてきていて、何のためにあるのか疑問に思っていた。

だが、ウエストポーチが取り除かれた今、そこには仰々しいバツクルが装着されていた。

金色の縁取りの中央には銀色に光る風車が据えつけられている…ズボンを抑えるためには大きすぎるベルトだ。

「これ…まさか、あなた…ッ?」

このベルトを付けたのは学生服にウエストポーチを巻きつけ、ついでにマンホールに埋めやがったヤツと同一人物だろうが…。

こんないいベルトをかうセンスがありながら、なぜウエストポーチなんて巻きやがった、許せねえな。

「あなた、イレギュラーなの? それとも…あいつらと同じ…ねえ、どっちッ?」

「？ 何の話だ？」

聞き返したとき、日差しを遮るようにしてマンホールの中に複数の影が差した。

大学生か、ダブった高校生か、それぐらいの歳に見える。

「…なんだ？ なにやってんだ、アンタ？」

「コンクリートに埋まってる、出してくれ」

思いつきり不審そうな目をしつつ、男たちは互いに顔を見合わせた。

「あー、まあ、いいや。とりあえず、その娘を差し出してくれや。そいつ、イレギュラーなんだよ」

…イレギュラー、またその言葉か。野球中継で何度か聞いたことがあるが、どんな意味だったか。

「アンタ、助けてよ！」

「無理に決まってるだろ、イレギュラー。その人、埋まってるし」

「つーか、お前らみたいなのを助けるヤツなんていないんだよ、イレギュラー」

暴れまわる女の子をひとりの男が引き上げようとするが、女の子も金切り声を上げながら抵抗する。

話にサッパリ付いていけないが、ひとつだけわかっていることがある。

「…お前ら、その子をこのあとどうする気だ？」

「あ？ 決まってるだろ、イレギュラーの収容施設に入れるんだよ、殺しはしねえ」

死ぬこともありうる、そう云っているようにしか聞こえない。

「よお、小娘」

「…え？」

「そんなにそいつらと一緒に行きたくないんだな？」

女の子が返事をする前に男たちは女の子を引き上げられた。

だが、羽交い絞めにされた彼女の表情が、質問への回答になっている。

「そうか…だったら、ウエストポーチを外してくれた分の借りは…」
「どうやらさつきまでは女の子が死角になったせいで、マンホールの上にいた連中からは見えてはいなかったらしい。」

俺の腹部に付いているベルトが。光り輝く俺のベルトが。

「なんだ、お前、それ…ッ？」

別に確信が有ったわけじゃない。だが、俺にはその言葉を躊躇う理由がありはしない。

「変・身」

宣言と共にベルトから光と風があふれ出し、俺の身体は変わっていく。

それと同時にアスファルトを引き裂き、ブチ砕いて、俺の身体は浮上する。

「なんだ…なんなんだ、お前は！」

振り向きもせず、俺は斜め後ろの九人の男たちの驚いた顔を見ていた。

俺が引き裂いたアスファルトの上に腰を抜かすヤツ、今にも泣き出しそうなヤツ…だが、どいつにも共通しているのが敵意だった。

「…あんた…仮面ライダー…なの？」

変身すると同時に奪還した女の子は、俺の腕の中でそう訪ねた。彼女の瞳に写っている俺の顔は、頬から額に掛けてほとんど全天が見えるU字をひっくり返したようなバカデカイ複眼があり、しかも後頭部から二本の角がモヒカンのようにV字型にせり出している。抱いている腕を見れば、緑色に光る甲虫のような鎧には、手甲の

ように人という字をひっくり返したような意匠がメタリックシルバ
ーで施されている。

「ねえ、仮面ライダーなのっ？」

仮面ライダー…あのとき、俺たちと戦ったバイク怪人のことだっ
たはずだが…確かに今の俺は、あのときのバイク怪人によく似てい
る。

だが、違う。俺は違う。俺にはあの男のように風が吹いては
いない。風にもなれていない。

俺は、あの男のように理不尽な運命に立ち向かってはいなかった。
ただ将来が不安だったただけの…

「俺は…ただの…バイク小僧だ。仮面ライダーじゃない」

「…よかった…っ！」

俺が仮面ライダーじゃないと云った瞬間、女の子が泣いた。

仮面ライダーに会えなかったショックで泣いたわけじゃない、安
堵と喜びの涙だった。

「…あ？」

「だよなあっ、お前みたいにイレギュラーに肩入れする仮面ライ
ダーなんか居るわけがない」

「やるぜ、お前ら…」

「いくぜえッ」

九人の男たちは横一列に並び、全員がその手に一枚ずつのカード
と、どこことなく俺の付けているベルトに似た銀色の機械を取り出し
た。

男たちは腰にその機械を巻きつけ、カードを入れる。

【カメンツライドオウ クウガ】

中央に立っていた男が変わったのは、クワガタのアゴっぽい角の
生えた赤をベースにした戦士。

他の八人に比べて地味だが、重厚な完成度を感じる。

【カメンツライドオウ アギト】

その隣に立っていた男は、一人目とよく似た金色の戦士。

全体的にひとり目と似すぎているくらいだが、ひとりよりも鋭角が多く挑戦的だ。

【カメンツライドオウ 龍騎】

三人目の男が変わったのも赤、左手にドラゴンの頭を模した装甲があるが、あとは鏡写しにしたような左右対称。

口元が他の連中と大きく違い、かなりの軽装というのも特徴か。

【カメンツライドオウ ファイズ】

黒い全身に工事現場のオッサンが持っているような赤い光が走っている。

だがなんとなくか、感情を感じさせない。中に入っている人間が入れ替わっても気付かないような、無気力な殺意を漂わせている。

【カメンツライドオウ ブレイド】

一本角にタレ目という頭部に、それをコピーしたような形状の刀を持った青い男。

こういうタイプは、ケンカするときには切り札を多く持ちすぎるタイプだ。なんとなく。

【カメンツライドオウ 響鬼】

異形。他の連中とは一線を画した姿。口も目も角も全部が違う。だが、全身に漲っているパワーは他の連中と同じか、それ以上だ。

【カメンツライドオウ カブト】

赤いカブト虫といった風体で、体格は大きいがやたらにスピーディーな装甲だ。

その角は唯我独尊我が道を行く、といったオーラを感じさせる。

【カメンツライドオウ 電王】

赤い仮面に赤い胸板、なんというか、部品が余っている感。

細い部分と重装甲の部分が折り重なっており、ひとりの人間がひとりの人格で戦うように作られているように思えない。

【カメンツライドオウ キバ】

赤と黒を基調とした中性的な戦士、サングラスのようなコウモリのような奇妙な目のデザイン。

柔軟性と凶暴性を備えたデザインだ。

その九人に共通するのは、同じベルトを付け、それらが俺と少女に襲い掛かる気が満々という一点だ。

「さあ、俺たち仮面ライダー九人を倒してみろよ、イレギュラーッ！」

なんで、あいつらが仮面ライダーなんて名乗るんだ？

九人でひとりの女の子を追い掛け回すような奴らが、なんでそんな風に名乗るんだ？

「…助けて…くれるの？」

「ウエストポーチを外してくれた借りは返す…っつーか…なんかあいつら、ムカつくわ」

第三話 『レプリジン・ディケイドライダー&喧嘩は根性&コヨーテ・オルフェ

「っつーか…なんかあいつら、ムカつくわ」

俺が何気なく云った言葉に、相對するのは九人の仮面連中は…何
考えてるのか分からねえな、仮面付けてるし。

【カメンツライドオウ クウガ】

【カメンツライドオウ アギト】

【カメンツライドオウ 龍騎】

【カメンツライドオウ ファイズ】

【カメンツライドオウ ブレイド】

【カメンツライドオウ 響鬼】

【カメンツライドオウ カブト】

【カメンツライドオウ 電王】

【カメンツライドオウ キバ】

“クウガ”とか鳴ったベルトを付けていた男を中央に据えて、右
隣にアギト、左隣に龍騎を並べて、そのまま九人が扇状に並ぶ。
なんつうか、この立ち位置じゃないといけない、という決まりで
もあるように自信満々に立っている。

「なんだアイツ？ ディケイドライダーも無いのに変身しやがっ
た？」

「普通じゃないから“イレギュラー”なんだろ、オルフェノクか
ギルスじゃないか？」

「…どちらも違うな、私の見立てでは…ショッカー系の改造人間
だ」

仮面越しだというのに、なぜか俺には誰が喋っているのか感覚的
に理解できた。最初の発言が電王、次がブレイド、最後が響鬼。

その後も、各々がマカモウとかグロンギとか、横文字が続く。中学でアメリカ出身の元ボクサーとかいう教師を殴り倒したとき以来、英語を習っていない俺には辛い。

…横文字だよな？ 外来語だよな？ これで“真火最雨”とか“馬鴨鵝”とか…まさか“魔化魍”なんて書くことはないだろう。

「よオ、お前ら…大卒か？」

「ああ？ なに云ってたんだ？ 俺はまだ十八だぜ？ っつーか、こっちの響鬼のなんか三十路で中卒」

そう云ったのは電王の男。

っつつか、俺は自慢じゃないが記憶力は悪い方だが、よくこいつらの名前を覚えてるな、一回聞いただけなのに。

「僕はファンガイヤとレジエンドルガの混血だと思っけどな、ねえ、正解は？ イレギュラーあッ！」

何を云ってるのかは依然としてサツパリ分からんが、とにかく俺が誰かを聞いているらしい。だったら、いつもの喧嘩前の名乗りをするしかない。

「…俺は城南大学付属高校工業課三年、代々木悠貴だ」

俺の名乗りにも、九人の男たちは互いに顔を見合わせる…っつーか、仮面を見合わせる。

「…なに云ってたんだ、あいつ？」

「バカなんじゃないスか、“イレギュラー”には多い」

「違うないな、俺たち九人を相手に勝てる気なんだから…なんだ…？」

全員が弾けたように腕を振り、構えてみせるが、そのときだった。空間が揺れた。俺と敵ライダー九人を遮るようにして、名状し難い…光のカーテンのようなもの。

ユラユラと揺れているその幕が消えたとき、そこにはさっきまでは存在しなかった三人の怪人、三人とも俺に背を向けているが、ピンクと黒と白の怪人だ。

「な…貴様は…」

「オリジン・ディケイドの一行か」

オリジン？ ディケイド？ なんの話だ？

話は判らないが、その三人の中央の怪人…ピンクの男が俺の方を振り返った。

「お前、この世界の仮面ライダーか？」

九人の怪人軍団と同じベルトをしているが、他の九人はベルトが浮いているが、この怪人は妙に似合っている。バーコードのようなディテールの顔面、濃いピンク色の顔面には表情はないが、妙な親しみやすさがある。

「…俺は…仮面ライダーじゃない」

「仮面ライダーじゃないって、君はどう見ても仮面ライダーじゃないか」

そういったのはピンクと一緒に来た黒くてデカイ方の仮面ライダー…九人の中に似ているヤツがいる。ベルトこそ違うが黒いクウガだ。

「仮面ライダーってのは…なんだったら云いかかわからねえが…俺や…あの九人が名乗って良い名前じゃねえ…」

本当になんと云ったらいいのはわからない。ただイラつくんだ。あいつらに“あの男”と同じ名前を名乗らせるのが。“あの男”の命を奪った俺がその名前を名乗るのが。

「…？ どういう意味？ それ？」

「…別に名前なんてのはどうだっていい、行くぞ」

納得行かないような黒クウガを無視して、ピンクの仮面ライダーは…タッチパネル式の携帯電話のような道具を取り出した。

だが、携帯電話ではない。俺の強化された視力によればモニターには例の九人を象ったような九つのエンブレムが描かれている。

「ケータッチだとおっ!？」

「時間警察や…ネガの世界で行方不明になっていたそれを…どうしてお前が持っているッ？」

「…さあな」

どうやら凄いものらしいが、そもそも俺にはこのピンクたちが誰なのかすら判っていない。

分らないならば質問するしかないだろう。

「何者なんだ、お前たち」

「俺たちか？ 俺たちは…通りすがりの仮面ライダーだ。覚えておけ」

云ってから例の機械のモニターにタッチしていく。

【クウガ アギト 龍騎 ファイズ ブレイド 響鬼 カブト

電王 キバ ファイナルカメンライド デイクエイツ】

一筆書きでエンブレムをなぞったとき、ピンク色の仮面ライダーが変わった。

胸元に顔写真のようなものを貼り付け、額には自分の顔写真をインディアンポーカーのように貼り付けている。強そうとか弱そうとかそういう次元を色々な意味で超越したデザインだ。

「…お前ら…わかってるのか？ 九対四だぜ？」

「分かっているよ。お前らがたったそれだけで俺たちを倒せると思ってる能天気なヤツらだっただけのことよな」

苦渋に満ちた雰囲気、あいつらに広がっている。この三人が尋常じゃないことは俺にもわかる。だが、こいつらは忘れていない。

「なあ、オイ、ひよっとしてお前らも戦う気か？」

「安心してください、俺たち、仮面ライダーと戦うの慣れてますから」

「…慣れたくて慣れたわけじゃありませんけどね…」

天然気味な黒クウガに、白キバが疲れたように呟く。ボディライオンと声からしてどうやら白キバは女らしいが、そんなことよりも俺はリーダーと思いきピンクのインディアンポーカー野郎の肩を叩いた。

軽く振り返ったところで、そのまま横顔にパンチを叩き込む。

「え、つちよ、ええ?」

「…ああ?」

倒れることも無く、ふら付いただけだが、イラついたような声を絞り出すピンク。

「ふざけんな、あいつらとの喧嘩は俺が買ったんだ。いきなり出てくるんじゃないよッ」

「え、いや、喧嘩…って…?」

「ちよつと、落ち着いてください」

白いキバと黒いクウガがなだめるように近づいてくるが、それをピンクが手で制す。

「…こいつらは…お前がケリを付ける、そういうことだな?」

「当たり前だろうが」

「そうか。それなら譲ってやるよ」

大して考えるそぶりもなく、ピンクはあっさりと言って云った。

「ちよつと、土くん!」

「土、良いのか?」

「知るか。そいつがやるって云ってるんだからそれでいいだろ」

それでも食い下がろうとするふたりを無視して、ピンクの仮面ライダーは指を鳴らすと、現れたときと同じ光のカーテンが現れ、三人を飲み込んでいった。

「…結局、誰なんだ、お前ら…?」

「…通りすがりの仮面ライダーだ。そういつただる」

言い残し、本当にその男たちは通り過ぎ、カーテンが消えた後には、怪人は例の九人が突っ立っているだけだ。その九人は安堵して力が抜けるのが判った。

「よお、この喧嘩…もう始まってんだからな?」

もう始まっている。こいつら九人があの女の子に売った喧嘩は、俺が買っているのだから。

挨拶代わりの先制攻撃だ。軽く跳んでアイツらの目の前に降り、そこから殴りかかってひとりをノックアウト…そのつもりだった。

だが実際は、四車線道路を飛び越えて、一人の仮面ライダーを巻き込んで、そのまま反対側歩道の飲食店のショーウィンドウをぶち破り、そこで止まった。

巻き添えにしたのは、たしかアギトとかいう金ピカの野郎だ。

「…この店も…アギトって云うのか」

俺は看板を眺めながら、今巻き込んだ男をチラッと見た。アギトとはどういう意味なのかはわからないが意外とよくある言葉なんだろう、なにせレストランに付けられているくらいだから。

そんなことよりも、残った八人は慌てず騒がずだ。

「…パワーは有りそうだが…どうする？」

「なら、ここは俺の出番でしょ」

指を鳴らし、肩を回しながら一歩前に出たのは響鬼の男。その全身からは強烈なパワーと自信を感じる。

俺も変身してからはかなり身体能力が揚がっている実感があるし、他の自称仮面ライダー連中もかなり力を感じるが、この響鬼というヤツはその中でも格別だ。

「カ比べか…面白いッ、勝負だ。響鬼」

「そう、カ比べだ…ただ、俺とお前の勝負じゃないがな」

キイイン、という耳鳴りのような…音が聞こえた。前にも感じたことのあるそれを合図に俺はもうひとつ気が付いた。いつの間にか視界の中に居たはずの龍騎がいない。俺は龍騎の姿を探しつつ、ショーウィンドーに背中を預けた。

「いらっしやい」

俺はショーウィンドーに背中を合わせたが、突如として鏡の中から二本の腕が俺を羽交い絞めにした。俺の複眼は背後を捉えており、龍騎の奴が鏡の中に居た…鏡には入れるのか、コイツは。

「その龍騎も俺ほどじゃないがパワー自慢でな、俺以外の仮面ライダーのパワーじゃ外せない」

響鬼の紹介に、得意げに両腕に力を込める赤い龍騎、ヤベェな。確かに腕力だけなら明らかに俺を上回っている。締め付けられて

いる肩が引きちぎられそうだが…この龍騎よりも強いのだ。あの響鬼という男は。

「音撃は要らねえ、拳だけで充分だ」

雄叫びを上げながら響鬼が殴りかかってくる。ダッシュで加速を付け、そのまま走りの勢いに投げ出したような拳をたたきつけられた俺の頭は揺れた。

火花が散り、俺の目に何かゴミが入った。ヤツのパンチの衝撃でヘルメットの複眼にヒビが入り、破片が目には飛んだ。

「…が…？」

「オラオラオラオラッ、オラアッ」

続けて繰り返される拳は一発ごとにヘルメットの中の俺の頭を、頭の中の脳味噌を揺らした。

だが、脳味噌の中にある俺の心は揺れない、折れない。何発殴られてるのは判らない、猛烈なパワーだ。ヘルメットの下では骨のひとつやふたつ折れているかもしれないし、痛いもんは痛いけど…それだけだ。

「ウオラアアッ」

渾身の肘鉄に、とうとう俺のヘルメットが割れて完全に俺の両目が露出した。

…不思議な感覚だ、残っている複眼部分は未だに後ろを“見て”いるが、変身が解けた正面はいつもの光景が写っている…にしても痛い。この前、ナナハンに轢かれたときもこんなに痛くはなかったぞ？

ナナハンって云えば、俺のバイクどこ行っただよ、アレがないと何もできない…こいつを倒したらまずはバイク探すか。

「この野郎、これだけ殴ってるのに…なんで変身が解除されないし、死にもしないんだッ」

殴ってる方が疲れてきたらしい。当然だ。後ろから押さえ込んでいる龍騎とかいうヤツが十トンなら、殴ってる響鬼の方はその倍くらいある。

その力をただベルトの力で変身しただけの肉体で殴りかかれれば、どんな工夫があっても身体に負担が掛かる。鍛え方が足りないな。誰だって一度や二度は経験があると思うが、喧嘩してて金属バツトで三人も殴り倒せば結構疲れるだろ？

そしてそれは、そんなパワーで殴られ続けて吹っ飛びそうになっている俺の身体を抑え続けている龍騎にとっても同じだった。

「っ？」

龍騎の力が抜けたわけじゃない、ただ腕に力を入れ続けようとして足元が留守になっただけ。だが俺にはそれだけで充分、足に力が入っていないなら腕力は関係ない、俺は思いつきり前屈みになり、龍騎を鏡の中から引きずり出して響鬼に背負い投げた。

反射的に響鬼は龍騎を払いのけ、その衝撃で龍騎の変身が解けた。これでまずはひとりだが、今は多対一の喧嘩中だ。ひとり倒した辺りがヤバイ。

「デিজエ：オンドウルヌツコロズツ！ 次は俺だう！」

視線を向けるまでも無い、俺の複眼の横部分が見ている。

ブレイドのヤツが、バインダーのようなものを取り出して何枚かのカードを取り出している。

【アタックライドウ キック】

【アタックライドウ サンダー】

【アタックライドウ マツハ】

三枚のカードを次々にベルトの中に入れ、そしてベルトが強く発光しだした。

「食らえ、ライトニング・ソニックだア！」

猛烈なスピードで走りぬげ、俺の眼前でジャンプしたあいつの足はバチバチとスパークしている。

経験上、ダツシユしてからのドロップキックなんてのは大して痛くないはずなんだが…こいつらを甘く見ていた。

「ご、おおおおっ？」

死ぬほど痛い。電撃が体内をのたうつ。叩き込まれた胸板が割れそうなほどに痛む。だが、泣き出すほどじゃない。死ぬほどでもない。俺が仮面ライダーを殺したときの蹴りはこんなものじゃなかった。

あの仮面ライダーのようにはいかないかもしれないが、俺みたいなクズでもこんなもので死んでやるわけにはいかない。

「…ああ、なるほど、カードを入れると強くなるのか…昔、やったことあるぜ。バーコードリーダーだろ」

「オンドウルソドボツデンガーッ!？」

今のブレイドの発言はかなり聞き取りにくかったが、多分、『本当にそう思ってるのか』だ。ここまで滑舌の悪い奴は初めて会った。

当の本人も気がついていいるらしく、気を取り直して

「俺のオリジナル技、マグネタイプ・アイアンでトドメだ。こいつは凄いぜ。カテゴリー7で硬化した身体で4・8で相手に体当たりす…あれ、ない?」

バカだな、今頃気付いたのか…あいつの腰に既にカードファイルはないことを。一瞬和んだが、まだまだ油断してられない。

【アタックライド クロックアップ】

ブレイドの音声を遮ったその音を聞いたのと同時に、俺の身体は宙に浮いていた。

目に見えない連打。まるで時を止めているかのような衝撃が、何発打たれたかも知覚できないスピードで、何をされているかもわか

らないようなスピードで全身を様々な角度から叩きのめしていくが、痛くない。

こいつの攻撃には怖さがない。そいつの姿は俺には見えないが、奴には俺の姿が見えるはずだ。ヘルメットが壊れていて都合が良い、こっぴうタイプの奴にはこれが一番効く。速く動いてるなら止めれば良い。

見えた。俺の真下で動きがピタリと止まっている。

「おあッ？」

捉えていたクウガが声を上げる、俺のネックチョークがカブトの頸部を捉えていたからだ。

ほんの一瞬抱えていただけだが、すぐにカブトは落ちた。速く動くといっても意識も速くトぶとは、どういう仕組みなんだ？

「バカな、どういうことだ、なぜカブトの動きが止まったんだっ？」

「ンナツエダアッ！　ンナツエダアッ！」

「念動力かなにかか、あの怪人はアギトや鬼、超能力者なのかッ」
勝手に騒いでいるあいつらに、別に隠す意味もないから教えてやることにした。

「…ガンくれてやったら、勝手に止まったぞ、こいつ」

蛇に睨まれた蛙という言葉があるが、今のは俺に睨まれた根性なし、だ。

速く動くというのは凄いことだと思うが、それだけじゃダメだ。

自信がなければ俺をノックアウトできるわけがない。

もつと“神に代わって敵を倒す”とか“俺は総てを司るぐらい強い”とか“地獄に落ちてでも殺す”ぐらいの気合が必要だ。

とにかく、ブレイドの後ろでは、さすがにガラスに突っ込ませただけでは参らなかつたらしくアギト、タフネスが自慢の響鬼は既に準備を終えている。

「…お前ら、一斉にライダーキックだ。三人分の合体キックならさすがに倒せる」

「あ、いや、響鬼、それがよ…」

「なに躊躇ってる、行く…って、あ？」

響鬼は腰にあったはずのカードファイルに手を伸ばすが、腰元を探るがそこには何も無い。

「…探してるのは、どれだ…？」

俺は云いながら、手元の“五冊の”カードファイルを見せてやる。

「…な、エツ？」

「手癖が悪いんだよ、俺は」

それぞれがアギト、響鬼、龍騎、ブレイド、カブトのファイルだ。戦いながらとりあえず掏っておいた。

「どういうわけか、意識を失った龍騎とカブトのファイルは使い物にならねえが…お前らののは使えるぜ」

俺は自分のベルトを弄ってカードを差し込む場所を探し、それぞれのファイルから抜き取ったカードを一枚ずつ差し込んでいく。

ナイフを持って喧嘩に行こうとする後輩を止めたり、万引きしたダチのポケットからブツを取り出すために使ってたスキルが、暫くぶりに役に立った。

【フォームライドウ アギトフレイム】

【アタックライドウ オニビ】

【アタックライドウ スラッシュ】

適当に読み込ませたが成功したらしい。俺の右腕は紫の炎と共に赤く染まり、その手には真っ赤な長刀が現れている。

剣は使ったことはないが、まあ出刃包丁と大して変わらないだろう。

「いやいやいやいやッ!？」

「それはない、それはない、それはないだろう、少年ッ!」

「ダディヤーナザアーンッ!」

なにか喚いているが、そもそもこれの止め方なんて俺は知らない。

「行くぜ」

「来るなあアアアアツツ!？」

俺はこの武器の使い方をなんとなしに知っていた。

近づかなくてもこの武器は使える、ただ振ればいい…上段から思いつき振りかぶると炎の剣はアスファルトを焦がしながら三人まとめて飲み込み、そのまま道路の上に投げ出す。変身も解除されて例の銀色のベルトも砕け散っている。

「峰打ち…って奴だ、安心しろ」

炎に峰があるかどうかは知らんが　と心の中で付け足し、今まで動きがなかったクウガ、ファイズ、電王、キバへと視線を向ける。やってみるとわかるが、あまりに大人数でひとりに襲い掛かると仲間が邪魔で動きが阻害され、仲間に攻撃が当るので、まず五人が襲い掛かって四人は第二陣、ひとりを中心にするなら悪くない作戦だ。俺もやったことはないが何度も同じことをされてきた。

「根本的な間違いは…俺相手に、たった九人で挑んできたところだけだな」

「うるさい、やるぞ。電王。あの思い上がったイレギュラーをぶちのめすぞ」

殺意をむき出しに、他人を傷つけるのが楽しいと云わんばかりにクウガの男がカードを構えた。

やっぱりあんな笑顔だろうとなんだだろうと壊すような奴には仮面ライダーは名乗らせねえ。もっと笑顔を守る、ってぐらいのヤツじゃないと。

【フォームライドウ　クウガペガサス】

【フォームライドウ　デンオーガン】

クウガと電王の色合いが変わり、手元にはそれぞれボーガンとガ

バメント拳銃のような武器が出現し、もちろんその銃口は俺に向いている。

「それはズルいんじゃないか？」

「キサマを殺すけど良いだろ、答えは聞いてないがなッ！」

「知るかッ、死ねエ！」

殺意剥き出しでふたりはトリガーを絞り、俺に弾丸…か？ よくわからないがとにかく何か次々と降り注ぐ。ヘルメットの割れ目を両腕で庇うが、痛いものは痛く、俺は膝を折った。

つか、電王のヤツ、ソードの時から思っていたがやたらに声が擦れている。

そんなわけもないが、フォームチェンジをしたらもっとう…声優みたいな声が変わってくれたら助かったのだが…そんなことを考えている間に、ファイズとキバもカードを抜き放ち、ベルトに装填した。

【ファイナルアタックライドウ キ・キ・キ キッツバアッ！】

【ファイナルアタックライドウ ファ・ファ・ファ ファイツズッ！】

俺は目を疑いはしない。自分を疑ったら終わりだ。

ふたりは変形ロボットのようになり、どこがどうなっているのか分からないが、キバが巨大な弓、ファイズはでかいバズーカ砲のように可変し、キバはクウガの手元へ、ファイズは電王の手元へ…四人で繰り出す攻撃、どう見ても、どう感じても、あれがヤツらの切り札。

「ならば、俺もコレを使わないわけにはいかないな」

仮面ライダーを殺した俺の持つ技の中で最大の破壊力を持つキツクだ。

気に入っているわけじゃない、あのマッドに仕込まれた俺の“機能”だが、使わないわけにもいかないし、勝負となれば燃えざるを

えないのが俺だ。

「勝負だ、四人とも」

クウガがキバの、電王がファイズの、それぞれ蓄積されたエネルギーを解き放つ。

それを待ち構えるように俺も大地を蹴り、あいつらが四人掛かりで放ったエネルギーの激流に脚を突き出す。

「ウルオおをおオオオッ！」

バツクルに取り付けられた風車が回り、周囲の空気を飲み込んでいく。

いや、空気だけじゃない。やつらの放った衝撃波を飲み込み、その分だけ俺の左足は強く輝いていく。これが俺のフェイタルキック。空中でエネルギーと激突しながらも、俺本体にはダメージは来ない。痛くも、痒くもない。視線を四人組の方へ向ける余裕さえある。俺はどんどんビームを媒介にしてあいつらからエネルギーを吸収していく。

「な、なんだア？」

見ていると、電王とクウガンも様子が変わった。電王は装甲が弾け飛んで地味な姿になり、クウガは色味が抜けて白くなっていく。

「なんで俺がプラット…クウガのヤツはグローイングにッ？」

その答えもないまま、ファイズとキバも武器の姿から変形して元の姿へ戻り、エネルギーの放出も中断され、ただ空中の俺を見上げて呆然としている。

「…食われた…俺たちの…エネルギーを…！」

「俺たちが変身に使ったエネルギーを奪い取る仮面ライダー…ッ？」

やつらの視線には覚えがある。俺が五十人を殴り倒した辺りで、残りの五十一人が俺に向けていたのと同じような…自分とは違うものを見る視線。俺の左足は奴らから吸いきった変身エネルギーを備え、力の奔流となって絡み付いている。

「まるで…仮面ライダーを倒すために生まれた…仮面ライダー」

「…ッ！」

「フェイタル…キイイイイックッ！」

アスファルトをぶち砕き、衝撃波が四人全員は弾き飛ばされ、変身が一拳に解除され、やつらの腰に付いていたベルトが割れるのが見えた。

振り返れば、他の五人の腰に付いていた機械も大なり小なり割れていて、既に使える様子では無さそうだ。

「バカな…変身解除だけじゃなく、ベルトを壊すなんて…お前は…お前、一体…！」

「なんなんだ、なんなんだよオ…そんな、仮面ライダーを倒すためみたいな能力…どんな仮面ライダーなんだ、お前…ッ！」

怯えたようにキバだった男が云う。いつだってこうだ、負けたヤツってのはいつだって無様だ。

「知るかよ…っつーか、俺を…仮面ライダー…って呼ぶな」

「ヒイイ、すまねえ、許してくれエ、命だけは…」

「殺さねえよ、ただ…色々と聞きたいことがあるだけだ」

そこに来て思い出したが、いつの間にか例の女の子や、最初に倒した五人の姿がない。

それはそうか。あの娘にすれば俺が勝つなんて思ってたんだろうから、その間に逃げるのは当然だし、それはそれで問題ない。

あの娘にはウエストポーチ分の借りが有るし、それに戦ったのも俺の勝手。

だが、残りの五人は違う。ベルトが壊れたのは事実だろうが、それでも仲間を見捨てて逃げていい理由にはならない。

「まずは…何から訊くかな…あー…」

俺は変身を解かないまま、戦意を失った四人に向けて視線を送る。訊きたいことはいくらでもある。俺の身体はどうなったのか、世界はどうなっているのか、こいつらは何者なのか、俺のバイクはどこか、俺はどうすればいいのか…こいつらが知っているとは思えないが、訊いて見るだけならタダだ。

そんな風に考えている間も、四人は怯え切ったように震えている……が、ひとりだけ違った。

「お前ら……逃げる！」

その男は、変身前と変わらない様子で……未だに自分がファイズであるかのように敢然と立ち上がり、俺にレスリングタックルをかけた。

「ファ、ファイズっ！」

「う、うああああ！」

三人は叫び、中には泣いているヤツもいるが、とにかく走り出す。こいつらも仲間を置いて逃げていく。

「……骨のあるヤツは嫌いじゃねえが……来るならやるだけだぜ！」

お前が生身でやるなら俺も変身を……ちょ、ちょっと待て、これってどうやったら変身が……っ？」

ヤバイ。変身の解除の仕方が分からない。どうしよう。このまま変身が解けないと飯も便所も困る、そんな風に考えていると抱きついてきたファイズの男の方が変わった。

肌が脈打つように、全身に黒いタトウのようなものが浮かび、いつのまにか灰色の怪人に姿を変えた。その姿に逃げていた四人がまたも悲鳴を上げる。

「ふ、ふ、ふええええ！」

「ファイズは……オルフェノク……イレギュラーだったのかよっ」

「バケモノだアアア！」

泣き叫び、酔っ払いのように千鳥足で走っていく。

オルフェノク……なにかキツネとオオカミの間のような顔をしていて、自称仮面ライダーではないらしいが……どうしてか、俺にはコイツの獣の顔が……泣いているように見えた。

「……お前、名前は？」

「コヨーテ……オルフェノクっ！」

「そうじゃなくて、もっと日本人っぽいヤツだよ。俺は代々木悠貴、お前は？」

「犬神 いぬがみ 歌守輝 かすきだよつ、イレギュラーっ！」
いい名前じゃねえか そう思いつつ、俺はスーツ越しに伝わっ
てくる歌守輝のパワーに意識が飛びそうになるのをこらえていた。

第三話 『レプリジン・ディケイドライダー&喧嘩は根性&コヨーテ・オルフェ

オマケ

名称：シ　ダの世界。

備考：改造人間、地の国、B26宇宙人、グロンギ、ミラーモンスターなどが存在し、その存在を撲滅すべく、シ　ダとレプリジン・ディケイドたちが戦い続ける世界。しかしこの世界では改造人間やオルフェノク、超能力者たちも“イレギュラー”と称され、怪物として虐げられている。

特記事項：この世界の正式名称は、次かその次ぐらいで登場するオリジナル仮面ライダーの名前。

名称：レプリジン・ディケイドライダー

能力：設定された仮面ライダーのライダーカードをセットすることで、その仮面ライダーにカメンライドすることができる。他にもアタックライドやフォームライドでその仮面ライダーの能力を再現する。

備考：門矢士の所有するオリジン・ディケイドライダーと異なりトリックスターを持たず、調整されたひとりの仮面ライダーにしかカメンライドできず、さらにケータッチとの合体機構がオミットされていてコンプリートフォームが使えない。その開発経緯や目的などは未だ不明。

第四話 『カザマツリ×真×ロングポール』（真）

割れたショーウィンドーは戦いの熱で溶け、道路上にガラスの水溜りに変わっている。

その水溜りの中をさっきまで仮面ライダーを名乗っていた連中が逃げ回っている。ベルトの残骸も置いていき、仲間たちに手を貸すこともない…負け犬を追う気はない、逃げるなら逃がす。

今は負け犬よりも、目の前の犬顔の男を歓迎するのが礼儀ってもんだ。

「…カズキ、もういいだろ？ やろうぜ」

《あいつらが逃げるまで、待つていたとでも云いたいののか？》

「そのつもりだったんだが、説得力なくなっちゃったなア。コレについては俺も知らなかったんだよ」

本当に知らなかったのだ。あいつが云いたいことも分かる。

クウガやアギトたちを見送っている間に、俺のマスクの穴は塞がっていた。

痛みも治まり、違和感こそあるが、どこに攻撃を受けたのかが分からない程度になってしまっている。

それにしても、灰色の犬顔怪人ことカズキは人間のように悠長に喋っているが、どうにも口で喋っている気がしない。

腹話術のように、なにか音の方向に違和感…どうだっけいいか。

「…やるのか、やらないのか、それだけでいいだろ」

カズキの質問と自分の疑問への回答をはさんで、俺は怪物になつたカズキへと注意を向ければ、左腕の爪が尋常じゃなく伸びている。しかも、ただ伸びるのではなく親指から小指までの五本がアサガオのように互いに絡み合い、一本の棒を形成している。

《…これが俺のオルフェノクとしての能力…左側の爪をどこまでも伸ばせる。そのまま使えば使えば鉄でも切れるし、纏めればこんな塩梅だ》

そう云って絡み合った左手の爪を叩き折り、孫悟空の如意棒のよ
うに軽やかに振り回している。

中国雑技団の演技を見たことがあるが、それと同じように華やか
で、それ以上に速く力強い。見世物としても充分に通用するような
如意棒っぷりだ。

にしても、さつきから仮面ライダーだのオルフェノクだの、わけ
のわからない単語が出てくる。

さすがにちよつと学歴にコンプレックスを感じるが、まあ、まず
は殴り合える距離まで近づかなくちゃ…。

《近づかせはしない》

それは、本当に如意棒だった。

伸びている。長すぎる。

前にバイク代を稼ぐために建設現場でバイトしたことがあるが、
そのときに見た大黒柱を二本重ねたくらい…逆に分かりにくいか。
とにかく長い。

《ロングポールツ！》

カズキの動きは見える。手の動きから如意棒の動きも分かる。

だが避けられない。カズキが手首を返すたびにスーツの中に鈍い
痛みが濁く滞るように溜まっていく。

痛くも痒くも有るが、泣き叫ぶほどじゃない…が、やっぱり痛い
し痒い。

《悪いな。俺は非力だからな。一気に殺せるほどのパワーはない、
苦しんでもらう》

カズキの変身していたファイズとは殴り合わなかったが、おそら
くそれよりパワーは落ちているのだろうし、先ほど戦っていた自称
仮面ライダー軍団の響鬼と比べれば、撫でられているようなもの。

だが、それでも長柄は苦手だ。俺のダメージを勝手に治す能力が
追いつかない程度には効いている。

「中々…やるじゃねえか。これなら…最初からファイズなんて使
わずにこっちで…他の連中と一緒にやればよかったんじゃないか…

「?」
《できるわけがないだろう。俺のようなイレギュラーと誰が一緒に戦う》

なんだ？ こいつ？

「そのまま、そこで死んでもらう…ッ」

なんで、殴られてる俺より、こいつの方が辛そうなんだよ？

「…どうしてお前、そんなに泣きそうなんだよ？」

《なにを…云っているッ!》

その言葉を聞いて、俺はやっとカズキがどこで喋っているかを知った。

声が出ている位置がどうにもズレている気がして、足元を見た。そのヤツの影が歪んで…というか、本来の形になっている。

怪人ではなく、投影されている映像のように、半裸のカズキが見覚えのある表情を浮かべていた。

どうやったたらそうなるのかはわからないが、後輩やダチ、それどころか他校の番長や教師の中にも居やがった。

なんでか泣きたいくせにそれに気付かないフリして、強がって粹がって、忘れるために喧嘩する。ナイフやらをやたらに振り回して、曲がりきれなくせにアクセルを吹かすヤツのツラだ。

「仲間を助けるために殿しんがりをするような男がメソメソすんな」

《泣きたいわけなんか…ないだろうッ！ あいつらが逃げたのは当たり前だ、変身ベルトもなくなり、オルフェノクが暴れている。》

俺を倒すために他のチームのレプリディケイドを呼びに行くなんてのはなッ》

カズキの棒を振るスピードが、まるで自分自身を振り切るようにまた一段と速くなった。

「…俺のアタマが悪いのか？ それだとお前も一緒に殺されるんじゃないか？」

《それ以外にあるか？ 俺のような…戦闘力と危険性の高いオルフェノクに対する対応がッ！》

「それ以外しかねえだろうっ！」
イライラする。

命懸けで自分たちを護ろうとするカズキを殺そうとするというあのクズども。

そんなクズのために涙を堪えながら俺と戦っているカズキ自身も。そして、こんな酷い世界で、ずっとグース力眠っていた俺自身にも。

「色々と言いたいことはあるが…まずはア…ッ！」

如意棒が振られる。俺は腕を出してガードするのではなく、右足を前に出す。

防御じゃない、俺の学力でもなんと云うかわかる。前進だ。

このまま防御していれば、如意棒が折れるまで耐えることもできるかもしれないが、そんなに待っていたら、きっと自称仮面ライダー連中が戻ってくる。

俺は逃げ切れるがカズキみたいなヤツは逃げることもなく殺される、そんな気がする。

《…止まれえっ》

「止まるかアッ！」

一歩近づくとたびにカズキの攻撃が早くなっていく。好都合だ。

痛みが俺の歩くペースも上げてくれる。その痛みが俺の迷いを誤魔化してくれる。

《痛くないのかッ？》

「痛いに決まってるだろうがッ！」

俺のスーツの中はぐっしょりと血で濡れている。密閉してるんだから乾くわけもないしな。

だが、そんなことはどうだっていい。怪我やら後遺症はあとで考えること。前進を続け…気がつけば、俺はカズキが如意棒振るには近い距離、俺が腕を伸ばせばちょうど当る距離。

「痛くても…それだけだ」

「…ち、つくしょおッ！」

とつさにカズキが如意棒を右に預けて、新たに左の爪を伸ばす。

左右の爪の塊を重ねるように自分の上半身を覆うが、もう俺は腕を振り切っている。しかも幸か不幸か、俺の拳はフェイタルキックの時のように光り、爪でのガードを容易く蒸発させ、そのままの威力でカズキの顔面を打ち抜いていた。

「…オルフェだかエノクだか知らん、何だろうとお前の勝手だが、泣きたければ泣け。ウジウジするくらいなら泣けよ」

何の動物なのかも分からなくなった頭部からカズキは人の姿に戻り、そのまま力が抜けたように崩れ、俺はとつさに抱きかかえるように支えた。

「放せ。お前は…敵だろう」

「んなことをお前が決めんな。事情は分からねえが…泣くときぐらいは胸でもなんでも貸してやる、だから…もうそんな顔するな」

腕の中のカズキがさらになにかを云った気がするが、俺にわかるのはスーツのヒビを少なくない水滴が伝っていくことと、これは受け止めなければならぬ。その水滴があらかた流れきったところでカズキは膝を折った。

「…もう話しかけていい？」

静かすぎた街中、その声の主を俺はずっとマスクの複眼越しに見ていた。さっきの仮面ライダー軍団に追われていた女の子。

甲羅から頭を出すカタツムリのようにマンホールを持ち上げて頭や両腕だけを覗かせている。

「ひよつとして気付いてた？ あたしのこと？」

「カズキとの戦いの途中からだな。なあ、コイツを預けていいか」

「…自分で運べば？」

「他の自称仮面ライダーが来ることになってるからな。誰かを守りながら戦うのは趣味じゃないんだ」

俺は担いでいるカズキをマンホールに運ぼうとするが、女の子は蓋を少し狭める。拒否のアピールだろう。

「あんた、ワガママね。自分は戦いたい、だけどその人は助けたい、つてさ」

「ダメか？」

「あんたの自殺に付き合う義理はないと思うけど？」

女の子の視線に俺はやつと気がついた。なるほど。俺の腕はツービートで痙攣して、それを知ったヒザが爆笑している。

強化スーツに支えられているが、生身だったらとつくに倒れているだろう。気にしないようにしていたが、確かに全身がマンシヨンの四階から突き落とされたときより痛い。

アイツらに殴られ続けて色々とおかしくなっているらしい……どれだけ寝てたか分からないが、鈍ったかな。

「他のレプリ・ディケイド……って云っても判らないでしょうけど、仮面ライダー、何体居ると思ってるの？ 勝てる気？」

「わからんが、一億人ぐらいか？」

「そんなに居るわけないでしょ……」

彼女は心底嫌そうな顔をしながら、一枚の写真を俺に見えるように差し出した。

「たったの…二十万人よ」

その写真には、さっき戦った連中が付けていたベルトが写っていた。

見たこともないような機械の中から、出来立てホヤホヤ、イキの良いベルトが工場で大量生産されている写真だった。

「逃げるのは嫌いだ」

「…戦うの？」

「いいや？ 逃げるのはイヤだが、敵が来る前にこの場を移動するのは…ただの移動だ。逃げるわけじゃない」

俺の意見に、その女の子はなぜかクスクスと笑った。まあ泣いているより良いだろう。彼女は笑顔のままマンホールのフタをどかし、手招きをした。

ノックアウトしたカズキは俺が担いだままで降りていくのを、彼女は先にハシゴを下りながら…って、それにしても面倒だな、この呼び方。

「よ才、俺は城南大学付属高校工業課三年の代々木 悠貴。 後ろのヤツは学校は知らないが犬神 歌守輝…お前は？」

ハシゴをスイスイと降りていく彼女は、名乗ってなかったっけ？ と前置きしてから口を開いた。

「あたしはマリナ。風祭真理奈。 かみまつりまりな 学校は行ったことないけど、とにかくパパの娘で、会ったことないけどママの娘ね」

「…カザマツリ…？」

どこか聞き覚えのある苗字だ。なにかが始まる…というか、プロローグのような気がする苗字だ。

第四話 『カザマツリ×真×ロングポール』（真）（後書き）

ほぼ戦闘シーンだけで終わっちゃったよ。

ああ、あと不良風の主人公っていう設定は偶然です。

フォーゼが始まる前からずっと代々木くんは代々木くんです。

ただまあ、始まってみるとアレだ。クロスオーバーはさせやすいし、弦ちゃんと代々木くん、の組み合わせは是非競演させたいのでフォーゼが終わって設定が落ち着いた頃にでも書いてみたいと思います。

…オーズについてもムービー大戦次第。

できればテレビ版のあとで書きたいし、アंकとかメダルとか、その辺りの設定をちゃんとして欲しい。

劇場版では、10枚目使用でタカゴリタかタカウゾ、それかサービスでタカパガルやブラカワニしか出ない展開とかだと嬉しかったけど…予告編でタトバ使ってるしなあ…。

番外『あなたのライダー募集中告知用ページ』（オリジナル）

はい、タイトルのまんまです。

明日からちよつと旅行に出るので、その前にページ作っちゃいます。

オリジナルライダー募集中。

本編登場はよっぽど多くなければ…まあ、俺のアクセス数だとそこまで多くはならないだろうから登場はほぼ確定。

ただ俺の執筆速度だといつになるかは分からんけど。

募集している仮面ライダーなんですが、基本的にはどんなスタイルでも可。

例えば、G3のように装着するタイプのオリジナルライダーだと装着者のネタはなくてもパワードスーツの方だけの設定でも可だし、逆に中身だけでもOK。

イメージイラストみたいなのは、有ればお願いします。

ない場合は、下のテンプレートにモチーフと色とかを記入してくれると作中描写が助かります。何々に似てる、とかでも書いてくれると嬉しい。

もしかしたらイラストとかで描くかもしれないので、その辺りの情報は多すぎることはないです。

既にオリジナル小説で活躍しているキャラクターも歓迎。

むしろ、そういう別作品同士のクロスオーバーも好きなので、作者さん本人の許可があればガンガン使っていきます。

その場合は『どここのページ参照』ぐらいでURL乗せてくれれば、あとは未記入でもOK。

テンプレート

パンチ力とかは別に記入しなくてもOK。
テレビ版でもスルーされるのが常ですし、付けたい人だけどうぞ。
他にも専用マシンのスペックとか、各部の名称とか凝った設定を
やりたい人はお願いします。

フォームチェンジのあるライダーも、フォームチェンジのルール
とかを書いてくれるばOK。

基本的にはどんな些細なデータでも、無いよりは有った方が良い
です。

変身者：山田太郎（るび：やまだたろう）

名前：仮面ライダー

パンチ力： t

キック力： t

ジャンプ力：ひと跳び m

走力：100mを 秒

必殺技名称：

必殺技威力： t

モーター：（未定でもOK）

メインカラー：（未定でもOK）

備考：

上を記入して、84g宛に『小説家になろう!』の内部メールで送ってくださいな。

ただし、全力でそのキャラクターを生かせるように扱いはしますが、イメージが違ったり、主人公の敵側になったり、死亡したりする場合はありえます。

その辺りは、ご容赦下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4522r/>

仮面ライダー Y （逆人）

2011年10月15日00時56分発行